

ニュージーランドの旅の思い出

藤本 勇

私たちは山や自然が好きで結ばれたので国内はもとより海外の旅も好きでした。団体ツアーで行く駆け足旅行でなく滞在型の旅行でした。行った先はネパール・ドイツ・フランス・ハワイ・台湾・ニュージーランドなどを寝袋を持って行きました。最近は寝袋を持参する旅のスタイルをバックパッカーと呼ぶようです。一番多く訪れた国はニュージーランド(NZ)の国です。



私たち夫婦は 1999 年から2009年まで毎年ニュージーランドに出かけていました。訪れる時期は日本の寒い 12 月から 3 月で南半球は日本と逆の温暖な時期でした。観光ビザで滞在できるのは 3 ヶ月。もっと長く居たければ、一旦出国して再入国したときもありました。毎年の旅は平均70日から80日ほど NZ に滞在していました。

この島に毎年のように訪れました。NZ におられる知人からは「なにもない所をよく行かれますね」と言われていました。別に高い山があるではないのに訪れたのは自然が多くあったからだと思います。

ニュージーランドの国鳥はキーウィーバードです。この鳥は絶滅危惧種で飛ぶことが出来ません。夜行性で博物館の暗い部屋で暮らしています。この鳥にスチュワート島では昼間に会うことが出来るのです。その珍しい鳥に出会えました。早朝小屋を出発して前に行く外人のカップルが「キーウィーがいる」と教えてくれました。道端の奥に動くものを見つけました。茶色の羽で内地のニワトリをひとまわり小さくした鳥でした。慌てていたのでレンズを向けることもできず、残念でした。

移動は主にレンタカーを使い、たまには長距離バスを使ったりして旅を楽しんでいました。レンタカーなら4人は乗れるので10年間で知人・友人を40名ほど、お誘いしてNZの自然や山を楽しんでもらいました。

いまは亡き高村泰雄夫妻と10日ほど一緒に旅をさせてもらいました。その時の記録がパソコンに残っていたので紹介します。書いたのは家内の光子です。

今回は南島のマウントクックやミルフォードを旅された高村ご夫妻と、ここで会うことになっている。

高村さんはダ
ンナの高校時
代の山友達で、
京都大学山岳
部の出身でチ
ヨゴリザやサル
トロカンリの遠
征に参加され
た山屋さんで
す。



約束の日、ウイチアングのバス停で待っていると元気なお二人が無事に到着。まずは夕食をと、近くの Seafood レストランへ。岩ガキ、海老とアボガドのサラダ、鯛のグリル。デザートはポイズンベリーのアイスクリーム。

皆でジントニック、ワインとワイワイガヤガヤやっていますが、ドライバーのダンナはお気の毒ですが一滴もダメ。B&B のリンチさん宅に帰り、皆で近くの土蚩を見に行く。

翌日は小雨の中、カウリフォレストを訪ねる。丁度、森の入り口に着くと雨も上がりラッキー。高村氏は京大農学部名誉教授だけあって、今までのただ見ていただけとは違って詳しく説明して下さい。カウリの大木はやはり感動されていたようだ。

午後はカセドラルコーブへの散歩。干潮時のみ通行可能とか。1時間たらずで到着。自然の潮や波が、このような大きな空間を長い年月かけて作ったのには、ただ恐れ入りました。

引き潮の間にもう1ヶ所行かねばならないのがホットウォータービーチ。

海岸の砂を掘ると温泉がわいてきます。たくさんの人達が砂をほったりねそべったり。掘っているとどんどん熱い湯がわいてきて”いい気持ち”とねそべっていると、突然大波がおしよせて、砂のふちをこわしてしまう。また掘って盛り上げる、といっ



た温泉です。1時間ほどここでゆっくりすれば身体はホカホカ。おなかもぺこぺこ。帰りは近くに元チャーチだったという素敵なレストランがあり。ここで魚を食べて帰宅。

ロトルアでは吹き上げる間欠泉やマオリの人達の唄や踊りを楽しみました。トンガリロ国立公園に行く途中の高原には斜面がピンクに見えるほどヒースの花が満開でした。ホテルの部屋がゆすぶられるほどの強風が吹いたおかげで翌朝は快晴。しかし、3年前ダンナが登ったルアペフ山の頂上は遂にその姿を見せてくれませんでした。

ワイトモはグローワーム(土蛭)で有名ですが、今回は Black Water Rafting の3時間ツアーを申し込む。

朝、出迎えの車で連れてゆかれた所には若い人ばかり。何だか熟年組の我々は浮いている。ウエットスーツを借りる時”私は小さい”といったら、手を横に広げて太いといわんばかりのポーズ。失礼したやっちゃん。着用すると短足の私は足丈が余って何ともおかしい。

更にその上にウエットスーツ保護のためブカブカのデカパンをはかされる。白いすべらない靴、ヘルメットを着けてドレスアップ！！とかで12名揃って撮影。

若い金髪のお兄さんはさすがに決まっていて、高村夫人と”かっこええねえ”とみとれていたら、その横に我らが同胞のお二人の雄姿。

思わずふきだしてしまいました。あちらも私達を見ておもしろがっていました。いよいよ一人ずつお尻の大きさに合う浮き輪を選び近くの川で練習。お尻をストンと輪の中に入れて飛び込む。うちのダンナは停止位置で止まれず、あっちの方に流れている。大丈夫かいな？水から上がるともう”寒い”と震えている。やっぱり体脂肪は、ほどほどに着けとかんとねえ。

いざ、洞窟へ。せまい入り口をおりると鐘乳洞の広場。そこで3名のインストラクターの自己紹介に始まり、一人ずつ名前、国籍を言う。

何故か、好きなアイスクリームも報告。いよいよ歩き出す。せまい所もあれば水に浮かばないと通れない位の水路もあり、暗い中でころばぬように必死についてゆく。やがて3米の滝に着き、いやおうなしにジャンプ。

私の前のアメリカ人はこわがってなかなか飛べない。インストラクターにつきとばされた。

その後は12名がプカプカと連なり、ヘッドランプを消す。漆黒の闇。
すると頭上には青い光を放つ土蛍。これはやはり感動します。まるで宇宙をただよっているような不思議な気持ち。ここでもやはりうちのダンナの”きれいなー。ええなー”の声のみが聞こえておりました。
だまって感動する、ということはあの方には出来ないのでしょうか？
最後に洞窟の先の明かりが見えた時には、何となくほっとしました。5時間ツアーにしなくてよかった。3時間で十分。スーツを脱ぎシャワーのあと暖かいスープやパンが用意され、充実したツアーで皆大満足。
若い人達の中で浮いていた4人組でしたが無事終了。高村氏との1週間はあれも、これもと欲張りすぎて、その点だけがご迷惑をかけました。でも飲むベエの高村氏との夕食は楽しかったです。
本当によく飲みました。ドライバーには気の毒でしたが。

=====